総特集 卒業の日に

卒業生の「これから」に期待する

商学部長
酒井正三郎（さかいしょうさぶろう）

商学部は、皆さんの学窓からの出発となるこの日を特別の感慨をもって迎えました。というのは、今日の卒業生の多くは二〇〇〇年度の入学であり、皆さんは商学部で九〇年の歴史を有した二部（夜間部）を廃止して昼夜開講制に移行したその年の新入生、つまり新生商学部の第一期生であるからです。プログラム科目の導入などカリキュラムも、商学部の伝統である深い教養に裏付けられた実学教育の追究、という理念にそって大幅に改められました。この学部改革の功罪は、今後の皆さんの社会での活躍如何によって定まってくると言ってもいいでしょう。

この四年間は従来にも増して激動の連続でした。「九・一一同時多発テロ」という前代未聞の事件が起き、それをきっかけにアフガンやイラクで戦争が始まりました。国内では「失われた十年」のデフレにより、「合理化・リストラ」の猛威が吹き荒れて中高年者の受難が言われ、「フリーター」なる耳慣れない言葉もいつの間にかすっかり定着しました。

しかしよく言われるように、困難な時こそチャンスの時でもあります。学生時代に身につけた知識・教養を生かし、自分の信じる道を果敢に突き進んで行ってほしいと思います。

漱石は『それから』の中で、今としてはやや大時代がかった言い回しの感がなくはありませんが、主人公代助の父親の口を借りて次のように述べています。「そう人間は自分だけを考えるべきではない。世の中もある。国家もある。少しは人のために何かをしなくっては心持のわるいものだ。・・・最高の教育を受けたものが、決して遊んでいて面白い理由がない。学んだものは、実地に応用して初めて趣味が出るものだからな」（岩波文庫版、三二八ページ）。

皆さんの前途の洋々たることを心より祈念して、卒業のお祝いの言葉といたします。